

教育ファームで、もっと“ふるさと”が好きになる。

「教育ファーム」最前線②



「おそはを作るのとクリスマス会、どっちに行く?」教育ファームに欠かさず参加してきた、ある母親が子どもに尋ねた。「おそは」子どもは迷わなかった。ソバと大根の種をまいてから約3月後の12月下旬、最終プログラム「おそは打ちと試食」当日は、地

自分たちで育てて食べたならおいしいね。ソバと大根づくりを通して、みんなの心に響いた農業への思い!

元の仕事と重なっていたのだ。事務局のNPO法人ハートム(清武町)理事長の初鹿野聡さん(48)は、この後日談を耳にして思わずほほを緩めた。普段は「うどん派」の子どもが、自ら収穫してきたそばを平らげると、光景を目にしたときにも確信、「やって良かった」と。モノを作り育てる体験は、幼心に何かを響かせたようだ。

生き生きハツラツの子ども 家庭では見せない、わが子の姿を発見した驚きも

親子23組70人が参加した9月6日の種まき当日。活動に理解を示したそば店店主の高武幸さんの畑を使い、指導を仰いだ。前日の雨で畑はぬかるんでいた。しかし、泥ソバと大根の種をまいた。肥料独特のおもい気にならない。親たちは「うちの子にこんな面があったのか」と感心した。子どもたちがハツラツと過ごせたのか、ソバが予想以上に密生。事務局のメンバーはソバ栽培にはない「間引き」に追われた。しかし、間引きしたソバをサラダで食べられることが分かった。ソバを収穫した。大根に付いた土は近くの川で洗い落とし、川で物を洗うという今では貴重な体験も味わえた。10月、ソバ畑一面を覆った白い花に誘われて急ぎ、花見会を開催。近くの畑で取ったピーマンを丸ごと焼いて食べ、子どもたちからは「あまー」と歓声が上がった。



「おいしい」と取りの食育や農業体験はしたくなかった。が初鹿野さんの持論だ。収穫や料理だけの単発ではなく、種から結果、口にするまでがわかり続ける。こうした一貫した体験が教育ファームの醍醐味だ。そうも言える。「親子参加」で開催が休日に限られ、作物の生育に合わせた日程を組むのに苦心した。それでも、自分たちで栽培した作物を残さず食べる子どもたちを見て、うれしさがこみ上げてきた。という。農が身近でないといわれる今、「日本人はDNAに農への特別な思いがある。そのスイッチをどうやって入れてあげるか。それが大人の使命」と初鹿野さんの妻万貴さんは力を込めた。学校や地域と連携し、放課後の時間をうまく活用できれば、さらに取り組みの輪が可能性も広がる。ソバに代わる作物の実施も検討中。新たな挑戦が始まっている。

「教育ファーム」最前線①



心地よい風が吹き抜ける5月末、霧島山の麓・えびの市永の畑(20ア)で、はた目には場違いな集団が動き回っていた。JAえびの市青年部23人と南九州大(宮崎市)健康栄養学部管理栄養学科の女子学生28人、時折黄色い歓声が響く。くわで畝を作り、マルチビニールを覆い被せる。青年部員たちの指導

「教育ファーム」で農・食・地域のキビリ直し

安全、安心、新鮮。食への関心が高まる中、農業への理解をさらに深めようとの取り組みが教育ファーム。JAえびの市青年部による「食と農をキビリ隊」、みやざき教育ファーム協議会による体験活動を紹介する。

「業」ではなく「農」を伝えたい
食の専門家を通じて「教育ファーム」を広める!

宮崎市の焼き肉とえびの産品ヒノカカリのにおい。2回目は竹を半割りにしてつなぎ40分のソムレン流しを行った。遊び心も盛り込み、ミニトマトや豚しゃぶ、牛しゃぶも。常にワクワクさせるエンターテインメントの演出も心掛けた。収穫は10月初旬。かまどで薪を取りに、手で薪を握り起こした。試食会では焼き芋にし、7種類の違いを確かめながら味わった。11月にはうれしい要請。「学園祭にぜひ来てほしい」と言われ、青年部員たちは大学で豚汁、焼き芋を提供した。成果発表会は翌年1月、グループや個人で米粉とサツマイモを使ったスイーツのレシピを発表し、評価も高い。11月に行ったコンテストの審査発表もあり、最優秀賞だったスイーツは、地元菓子店と協力して近く、地元産品の直売所・新鮮野菜館えびのの場で販売する。女子学生たちが考案した20種類のレシピを掲載した小冊子も作製した。9カ月間、5回を数えた活動。鬼川直也隊長

JAえびの市青年部は「やってきて初めて見えてきた問題点がある」と切り出した。これまで10年以上、さまざまな形で消費者や子供供

鬼川隊長の言う「農」とは、自然と共存しながら、家族と楽しく過ごし、季節に応じた行事を地域で盛り上げる。農村文化を守り、伝え、心豊かな生活を営める。農村ならではの暮らしを含めたものだ。畑のあぜ道には、ふらふら食べておいしいシロツメクサが生える。農家がこまめにあぜ道の草を取り、小川の掃除をしているからこそ、守られている。環境。そんなこともかかっている。2年目の目標は、食農教育の共通語・標準語を作ること。例えば、生産時は「コメ、流通に乗ると商品、行政にとっては食料、飲食店には食材となる。まだ見えてこないが、おぼろげには「生命」がキーワードになりそうという。今後、学生たちと一緒に模索したいと考えている。

2回目のつる返し・除草、3回目の収穫には女子学生の参加は39人、48人増加。青年部員も20人前後で推移し、当初の不安は吹き飛んだ。活動日の昼食は徹底的に地場産品にこだわった。食育活動の一つとして「JAえびの」野菜の栽培方法でも説明。ちなみに初回は



ちとの体験交流をしてきた。しかし、農業を取り巻く状況は良くならない。「大変な仕事と分かった」「苦勞して作ってもらったので感謝して食べたい」。小学生らの感想で思い当たった。それは農業の「業」に焦点を当ててきたかもしれない。もっと「農」のことを伝えなくては。

環境を守っている姿
豊かな農村文化や暮らしも知ってほしい

みやざき教育ファーム協議会
宮崎県宮崎郡清武町大字加納乙243-3

プロフィール
宮崎大学農学部付属自然共生フィールド科学教育研究センター、宮崎農業高校園芸流通部、NPO法人ハートムなどが連携して2009年3月発足。活動の様子を紹介するブログも立ち上げている

JAえびの市青年部 (食と農をキビリ隊)
宮崎県えびの市大字大明町1061-1

プロフィール
2009年5月に発足。食と農の専門家が互いの分野を理解し合い、知識を深めながらさらに成長し、食農教育の輪を広げることを目指している。食と農を「つなぐ」=方言でキビリは結ぶ=意味を込めて命名。JAえびの市青年部(59人)と、南九州大健康栄養学部管理栄養学科の女子学生で組織し、農林水産省の支援する教育ファーム推進事業を利用している。隊長はJAえびの市青年部部長の鬼川直也さん(36)。同大の指導者は学科学科の田上敬子教授。

全国にひろがる教育ファーム

いま、生産者(農林漁家)の指導を受け、育てて食べる農林漁業体験の元気な輪がひろがっています。ふるさとを元気にする思いと実践の数々、詳しくは、「教育ファームねっと」
【<http://edufarm.jp>】をご覧ください。

教育ファームで大収穫!

土にまみれたペディキュア色とりどりのビー玉みたい

活動初日から 感激のシーン

「食と農をキビリ隊」活動初日からうれしいハプニングがあった。サツマイモ苗の定植の時、作業を始めて間もなく女子学生たちがスニーカーを脱ぎ、次々と裸足で畑に入ったのだ。素足の彼女たちの足元を見ると、ペディキュアをして、「鮮やかな爪の色が土に映えて、ビー玉が転がっているように見え、きれいだった」と鬼川直也隊長、彼女たちが農の世界に飛び込んだ瞬間に思えたという。2年の佐藤愛さんは「靴に泥が付いて重くなったし、作業に邪魔だから脱いだらおもしろかった。フワフワして気持ち良かった」と言う。子どもにも戻った気分は、はしゃいで畑を走り回ってやっていたと清川水希さん。最近、2人はスニーカーで行くと「知っている人がいるので、近くなった気がして、えびの産が気になり始めた」とのこと。1次があるなら、ぜひ参加したい」と期待している。

教育ファームは、農業体験を通じて豊かな郷土愛を育みます。

六ノ里・棚田に広がるプロジェクト (岐阜県・郡上市)

虹色に輝け! 田んぼに泳ぐ魚たち

現地レポート

「田んぼにでっかい魚が泳いでいる!」となったら、インパクトがあつた。たくさんの人に足を運んでもらえるんじゃないかとスタッフたちは考えた。古代米など紫・白・黄・緑四色の苗を植えた...

見なきや 損そん 教育ファームねっと

教育ファームとは……生産者(農林漁家)の指導のもと、作物を育てるところから食べるところまで、一貫した「本物体験」の場を提供する取組みです。

全国各地のとれたて取材から実践の工夫を大公開! 現場のイキイキした声とともに、教育ファームの実践の醍醐味を紹介します。

指導者向け 実践ファイル
豊かな体験の場を演出するための実践的なアイデア・ヒント集。カード(64テーマ)を自由に組み合わせ、体験のレベルアップに

ワークシート 参加者向け
↓他にも魅力あるコンテンツがたくさん↓
実践の動どころ 技あり! ちょっといい話
教育ファーム写真館 感動体験の足あと
平成20年度「調査報告書」体験成果の調査分析をダウンロード

地域を元気にする 食農体験活動のポータルサイト

全国各地で広がる教育ファーム(農林漁業体験)。これからはじめたい方、すでに取り組んでいる方にオススメの情報があふく盛りりのウェブサイトを活用ください。体験活動で使える資料も無料配信中! 今すぐアクセス。

教育ファーム 検索

農文協「教育ファーム推進事業」事務局
〒107-8668 東京都港区赤坂7-6-1
TEL: 03-3585-1144 FAX: 03-3585-3668
農林水産省 平成21年度にっぼん食育推進事業「教育ファーム推進事業」